

## 明治御歌所派歌壇の再検討

— 鉄幹・子規による批判をめぐって —

長 福 香 菜

—

御歌所派は、明治二十七年「亡国の音」（五月十～十八日、『二六新報』にて八回連載）の与謝野鉄幹、同三十一年「歌よみに与ふる書」（二月十二日～三月四日、『日本』十回連載）の正岡子規から「旧派」として激しい論難を受けた。旧態依然からの脱却を図り、短歌の革新を求めた鉄幹と子規は新派と称され、革新運動の最たる存在として位置付けられている。二人によって繰り広げられた御歌所派批判が御歌所派歌壇全体の評価に直結し、今なお御歌所派はほとんど存在意義を否定されたままの状況に甘んじている。その状況は以下の三氏が次のように述べていることからもうかがえる。

小泉琴三氏<sup>（中略）</sup>は、

（前略）果して御歌所派の歌人が一派を形成するだけの表現様式を持つていたらうか。彼らは御歌所を中心として集合した漠

然たる存在にすぎない。強いていへばすでに述べたごとくむしろ桂園派歌風即前時代和歌の連続であった。（後略）

と述べ、御歌所派の存在を一蹴した。

武川忠一氏<sup>（中略）</sup>は、当時の短歌の多くが依拠する「伝統」を短歌革新には不要のものであるとした。

（前略）後述するように、実は全く実作にも改良の萌芽がなかつたのではないが、明治二十年代前半までは、論が先行する時代であった。論の先行は、革新に際しての常ではあるが、短歌が長い伝統を持ち、伝統は重い足かせにもなっていた。（後略）  
本林勝夫氏<sup>（中略）</sup>もまた次のように、古今集を賛美する御歌所派の作歌姿勢に革新が求められたことを指摘している。

しかし、旧派の歌は専門歌人としての格や、歌界の事情にうとい一般社会の空気もあって、以後も長く行われたのも事実だつた。（中略）明治革新歌壇の担い手たちは御歌所派、つまり

実質的には桂園派の歌人を否定したが、それは主として古今集以来の歌の形骸化にもとづいている。(後略)

三氏が「漠然たる存在」「重い足かせ」「歌の形骸化」と表現するように、鉄幹と子規が展開した古今集以来の伝統和歌の否定によって固定化された低い評価が、今なお通説として認識されている。

しかし、これは一部の偏頗な意見によって低い評価が定着した例であり、御歌所派の実態を何ら顧慮することなく踏襲されてきた見解である。これでは短歌史としてはなほ偏った内容であると言わざるを得ない。

そこで、鉄幹と子規が登場した明治二十年代後半～三十年代前半の歌壇の状況を把握できる雑誌の調査を行った。当時の価値観に即して短歌雑誌を検証し、これまで一面的であった明治歌壇の評価に再検討を加える。そして、この作業を通じて御歌所派全体の文学史上の意義を見直す足掛かりとしたい。

本稿では、鉄幹と子規によって御歌所派批判がなされた時期前後の明治二十五年から同三十三年に軸をすえて、当時の歌壇の枢要な位置を占めていた御歌所派に二人の発言が何らかの影響を与えたのかについて考察する。

なお、旧派とは新派から見た言い方であり、価値判断を含むため、本稿では御歌所派と呼称する。

## 二

今回調査を行った雑誌は、明治三十一年二月に創刊された『心の花』一号の「雑報」欄に含まれる「和歌をむねとせる雑誌」「新聞雑誌の和歌和文及び評論」項目に列挙された雑誌が中心である。『心の花』は竹柏会を主宰した佐佐木信綱を中心に発行された短歌雑誌であり、御歌所派と新派の論争の最中、一方に偏向することを極力避け、折衷的立場をうたった雑誌である。『心の花』が雑誌を紹介する際にもその姿勢が貫かれていることは言うまでもない。

二項目で挙げられている雑誌は次の通りである。

### 和歌をむねとせる雑誌

『筆の花』『敷島』『詞林』『大八洲雑誌』、地方誌『濱荻』

『国風』『歌文学』『やまと歌』『さちのひかり』

### 新聞雑誌の和歌和文及び評論

『太陽』『少年文集』『新小説』『めざまし草』<sup>注4</sup>『文庫』

『中外時論』『國學院雑誌』『国光』『女鑑』『女子の友』

『東洋哲学』『仏教』『なでし子』『女学講義』『海国少年』

地方誌『褒弘雑誌』『田園文学』『村きぬた』

この中で調査を行ったのは、『筆の花』『詞林』『大八洲雑誌』『めざまし草』『國學院雑誌』『女鑑』の六誌であり、この他に直文を中心に発行された『歌学』、さらに信綱を中心に発行された『いさ、

川「心の花」の短歌雑誌三誌を加えて、合計九誌を検討対象とした。

本稿では、「亡国の音」「歌よみに与ふる書」が発表された時期の御歌所派歌壇を再考するため、同時期に発行され、なおかつ当時の歌壇状況を知り得る雑誌を扱う。それが次の六誌である。

#### I 『女鑑』一号〜十九年七号

(明治二十四年八月〜明治四十二年三月・国光社)

西澤之助によって明治二十四年八月に創刊。『女鑑』は女子を対象とし、内容は学問や教育、家政、道徳と幅広い内容を持つ教訓的雑誌である。編纂と発行を行った西澤之助は、女子教育に尽力した人物である。『女鑑』は、主に前半の女子教育(『女鑑』「論説」「史談」「家政」「学園」、後半の短歌(『漫録』「文林」「雑報」「教の庭」)で構成されている。短歌が占める割合は大きく、当時の女子教育にも不可欠のものとして考えられていたようである。

#### II 『歌学』一号〜二巻四号

(明治二十五年三月〜明治二十六年四月・東京堂書房)

落合直文、小中村義象、久米幹文、金子富太郎、佐野鉦次を中心に発行され、「歌論」「考証」「歌式」「歌合」「歌範」「歌話」「歌評」「雑録」「歌集」「雑報」等で構成されている。一号の巻頭では、直

文が「発行の趣旨」として「賛成のゆゑよしをのべて歌学発行の趣旨に代ふ」と題した文を載せ、その中で十八点もの「ゆゑよし」を述べ、当時の短歌と歌壇が抱える問題を指摘した。しかし、約一年後終刊となる。その終刊の年、直文はあさ香社を結成する。なお、本稿では直接の引用はしていない。直文、信綱を扱う別稿において詳しく検討する予定である。

#### III 『國學院雑誌』一巻〜(明治二十七年十一月〜現在・國學院)

『國學院雑誌』は、國學院によって明治二十七年十一月に創刊された学術雑誌である。「論説」「講述」「評釈」「雑録」「応問」「彙報」「詞林」「附録」で構成される。「発行の趣旨」によると、その内容は「国史国文」を中心とする。

#### IV 『めさまし草』一巻〜五十六巻

(明治二十九年一月〜明治三十五年二月・盛春堂、

十三巻以降の発行所はめさまし社)

『めさまし草』は『しからみ草紙』の後身として、森鷗外によって明治二十九年一月に創刊された文芸雑誌である。評論を中心に構成され、小説、俳句、短歌等を収録する。明治三十一年頃までは短歌作品が多々見られるが、明治三十二年になると、短歌作品は少なくなり、略伝や随筆が多くなる。また、論説も見られない。発行兼

編纂者名には「星野諤治郎」とあるが、単なる名義人である。なお『歌学』同様、本稿での引用はしていないが、直文と信綱を取り上げる別稿で吟味したい。

## V 「いさゝ川」一号〜七号

(明治二十九年十月〜明治三十一年一月・竹柏社)

佐佐木信綱が主宰する竹柏会の機関誌であり、『心の花』の前身である。「さざれ波」「藻かり船」「玉がしは」「竹柏園各評」「やちくさ」等によって構成される。明治二十九年十月に創刊を迎えたが、二年にも満たず終刊となった。

## VI 「心の花」一号〜

(明治三十一年二月〜現在・こゝろの華発行所)<sup>(註6)</sup>

『いさゝ川』の後身として発行された雑誌である。一号〜十一号は「論説」「講演」「文学史料」「文苑」「漫録」「詞海」「雑報」「学園」で構成されていたが、二巻一号からは「筆陣」「文庫」「硯海」「漫録」「詞林」「雑報」「学園」「歌筵」の構成となる。一号「本誌発行につき賛成の諸君左の如し」には、正風をはじめとする御歌所派歌人らや竹柏会歌人、落合直文の名前も見える。

調査に際しては、まず鉄幹と子規の御歌所派批判の影響が雑誌に見られるかどうか焦点を当てた。二人の発言が当時の御歌所派歌

壇に打撃を与えていたなら、間違いないその影響は雑誌にも及んでいるはずである。次に、短歌雑誌とは言えないが、短歌欄や歌壇状況を如実に反映した記事欄を収録する『女鑑』『國學院雑誌』に注目し、御歌所派歌壇の動向を裏付ける資料として提示していく。

## 三

明治二十一年六月に設置された御歌所の所長に任ぜられたのは高崎正風であった。これによって、御歌所を担う各流派の中でも、桂园派が圧倒的勢力を誇ることとなり、この一大勢力を総称して御歌所派、または宮内省派と呼ぶようになった。<sup>(註6)</sup>

その中で、御歌所派に正面を切つて論難を浴びせたのが、与謝野鉄幹と正岡子規であった。本林氏が、<sup>(註7)</sup>

(前略) 少なくとも二十年あたりまでの歌壇は堂上派・桂园派・江戸派等々前代以来の構図がそのまま持ち越されており、「旧派」視されるような状況が生まれるには二十年代後半を待たなければならぬ。(後略)

と述べているように、その「二十年代後半」に鉄幹の「亡国の音」(明治二十七年)があり、子規の「歌よみに与ふる書」(明治三十一年)の発表が続いた。これが所謂新派の登場であり、御歌所派批判の発端であった。短歌革新への火蓋が切られたということであろう。

しかし、ここで留意しておきたいのは、鉄幹と子規の御歌所派批判をもって短歌革新への道が開かれたことと、新派が御歌所派に取って代わったことは、直接には結び付かないということである。安易に関連づけることには慎重でありたい。

たとえば、揖斐高氏は、鉄幹と子規の登場が御歌所派歌壇に与えた影響をそれぞれ次のように見ている。

#### 【鉄幹】

鉄幹が「亡国の音」において述べる歌論は、鉄幹自身のちに「随分蕪雑な議論」（『国詩革新の歴史』）だったと回顧しように、論そのものは一時の勢いに任せた大雑把なものであったが、旧派歌人の伝統的な修辭に頼った微温的な単調さに飽き足らなくなっていた当時の人々に与えた衝撃は小さくなく、その後の短歌革新運動の流れを作り出す起爆剤になったのは間違いない。

#### 【子規】

その第二回「再び歌よみに与ふる書」の冒頭に、旧派の歌人たちが標準とした歌集と歌人を指して「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」と一刀両断に切り捨てたのはあまりにも有名であるが、これまで概観してきたように、子規がこれを書いた明治三一年という時点では、旧派和歌と新派和歌の消長はほぼ決しており、旧派の因循は子規が改めて指摘す

るまでもなかったとも言えるわけで、（後略）

揖斐氏は、明治三十一年には御歌所派に代わり新派が歌壇の中心勢力になっていったという見解を示しており、すでにこの当時の御歌所派の存在意義を認めていないのである。はたして揖斐氏が言うように、鉄幹が「起爆剤」となり、子規登場時にはすでに「旧派和歌と新派和歌の消長」は「決して」いたのだろうか。それが事実であるなら、明治三十一年時には新派の短歌運動の興隆を見ることができはらずで、当然雑誌もその影響を受けていたに違いない。この歌壇状況を、明治二十七年前後は鉄幹の、明治三十一年前後は子規の発言が与えた影響に見ていくこととする。鉄幹「亡国の音」、子規「歌よみに与ふる書」によって展開された御歌所派批判とともに、その御歌所の長であった高崎正風の歌論も併せて見ていく。

#### 四

明治二十五年、鉄幹は落合直文の門下となり、同二十六年直文はあさ香社を結成、同二十七年鉄幹は「亡国の音」を発表した。鉄幹は、万葉集尊重の立場から、「模倣」ではなく「自己」による創造を歌の本質に求めた。

#### ① 与謝野鉄幹「亡国の音」（現代の非丈夫的和歌を罵る）（注9）

ア 歌に師授といふものあり。師授は偶ま歌の形体を学ぶに必要なのみ。歌の精神に至りては、我れ直ちに宇宙の自然と合す。何ぞ師授の諄々を待たむ。一呼一吸、宇宙を吞吐する度量の如きは、師と雖も譲らざる也。此の如くにして大丈夫の歌は成る。この見識なきものは現代の歌人也。彼等は万事を古人に模倣する也。模倣の巧拙を争ふ也。模倣を以て一生を了らむとする也。

イ 試に彼等に向つて歌を問はむか。『やまと歌は人のこころを種として』と云ふ古今集の序文、その他古人の歌論は直ちに彼等の口より鸚鵡的に繰り廻さるべし。また古今千載その他桂園一枝等に於ける古人の歌例は、必ずや歌の模範として彼等の口より素説的に説き出さるべし。之を要するに、彼等は唯古人あるを知るのみ。宇宙自然の律呂は彼等の耳を打たざるや久し。

ウ ○松島にてよめる（高崎正風氏作）

鳥づたひ舟こぎくればわが宿の庭にと思ふ松ばかりして  
語調の流暢なるそれ或は世の俗耳をおどろかすに足たらむ。されど品格の野鄙、構想の卑俗、あはれ誰がこを現代歌人の第一位に居る人の作とうべなはむ。

エ 高崎正風先生小出繁先生の如き、余に於ては皆先輩たり。先輩としての敬体は余の常に重んずる所、されどそは猶「私の情誼」に属す。「情」を以て「理」を没する能はず。歌学の正非を論ずるに当りては余の眼中既に先輩後進の階級なし。旗鼓堂々陣を対して相見ゆべきのみ、先生亦果して此道を愛し玉はむには「無礼」を以て余を責め玉はざるべき也。蓋し先生の如き其地位まさに明治の貴之たり定家たり。而して其学派は景樹知紀を祖述すと称す。世は先生を模倣すること先生の景樹友紀をせらる、が如し。模倣の毒は先生既に病めり。先生の毒は更に一世を病ましめんとす。否都鄙至る所謂ゆる「宮内省派」を模倣するタハケ者多きを見れば、先生の毒たる、現に一世を病ましめつ、ある也。「革新は進歩の一段階」先生の如き現代の歌人を代表する者、齧つてその「自己」を省みられむことを望む。

「現代の非丈夫的和歌を罵る」と副題に付けていることから分かるように、鉄幹は伝統和歌が持つ「師授」と「古人」の「模倣」が「非丈夫的」であるとし、伝統に支配される歌に窮屈さを覚えた。「師授」と「模倣」を抛り所とし、そこに絶対的価値を求めた御歌所派の歌の本質を認めなかったのである（ア・イ）。

そこで鉄幹は、当時の御歌所派の中枢を担っていた歌人らを名指

して批判した。そこで真つ先に非難されたのが正風であった。それが〔四〕である。「あはれ誰がこを現代歌人の第一位に居る人の作とてばなはむ。」と鉄幹が評しているように、御歌所派の頂点に立っていた御歌所長正風の地位は周知の事実で、鉄幹も認めていたのだらう。だからこそ、最初に正風を攻撃することに意味があつた。正風に続いて、小出榮、黒川真頼、福羽美静、黒田清綱ら御歌所派歌人も悉く批判された。

景樹以来の桂園派を継承していくことが「模倣の毒」であると、鉄幹は言う〔五〕。その「模倣の毒」が「現に一世を病ましめつ、ある也」ということは、当時の歌壇において御歌所派が広く浸透していたということなのである。

万葉集を理想とする鉄幹にとつて、伝統の継承に固執する御歌所派の作歌態度は無意味であつた。だからこそ鉄幹は、御歌所派を排斥することで、革新を目指したのである。しかし、正風を筆頭に御歌所派の主要歌人を名指しで論難しなければならぬ程、御歌所派は盤石の地位にあつたと言える。

その実態は『女鑑』からもうかがえる。『女鑑』二十八号（明治二十五年十二月十五日）の「漫録」欄に掲載されている「高崎正風先生談話」である。

先生云く、古今集の序に、心におもふ事を、見るもの聞くものにつけて、いひ出すとある、此心に思ふ事とあるが、歌の尤

も眼目とする所なり。（中略）歌は物事に感じて、しかる後ははじめて声に発するものなれば、感なき歌は歌にあらず、歌は偽らず、飾らず、實際をすら／＼といひのぶるをよしとす。（後略）

御歌所派歌人の一人であつた大口鯛二は、鉄幹登場以前の明治二十五年に、正風が歌論の主眼に置いた「古今集の序」に関する発言を談話筆記として発表した。また、この「談話」から約一ヶ月後の『女鑑』三十一号（明治二十六年一月二十日）の「漫録」欄で、鯛二は「桂園翁の直話」を記している。「桂園翁の直話」は、桂園派の飯野厚比という歌人が直接景樹の教えを請いたいと京都へ行った際の道中と景樹の教えを記した『若葉日記』を、厚比の子孫から借りて読んだ鯛二が書き写して掲げたものである。鯛二はその説明を次のように結んでいる。

いたづらに、ことばの上の美をのみてらひて、歌といふもの、いでくべき、心の源をわすれたる、よの人々のためには、こよなきいましめことならむ、とおもはるゝに、未だみぬ人のおほかりぬべければ、かきうつして、こゝにものしつ、

すぐ続けて『若葉日記』の本文となる。

ある夜雨いたくふりそほちて、参りくる人もなく、いとものしづかなる程に、大人とたゞ二人、うちかたぶきふかして、道の上のことゞも、何くれときこえうけたまはりける序に、大人のをしへてのたまはく、抑歌まなびのもと、ある所は、天然自然

の真心より、人情のいたれるかぎり、こまやかに弁へ知るをも  
て要とす。さるは物につけ事にふれて、感嘆にたへず、其情あ  
ふれて詞にあたはざるとき、独ながめつゞけて、おもひをや  
る。これをうたとはいふなりけらし。(後略)

ここまでの冒頭を読み進め、直前の掲載趣旨説明を合わせ見ると、厚比の言葉借りて景樹が提唱する歌論を多くの歌人らに必須の作歌理念として掲げること、鯛二が大きな意義を見出していたことが分かる。

同じく『女鑑』三十一号の「漫録」欄では、森馬太による「古今集伝授一班」の連載が始まり、三十七号(明治二十六年四月二十日)まで七回にわたる。

古今集は、醍醐天皇延喜年中、紀貫之、大河内躬恒等が、勅命によりて、撰進せし歌集なり。この集は意匠の緻密なると、用語の巧精なるとは、万葉集をも凌駕すべき、特異の点を具へたり。況や、後世これと対を取るべき、歌集の一つも見当らざるに於いては、古今の名、豈たゞに延喜時代の専用物のみなりとせんや。(後略)

古今集の奥義が秘説として重んじられ、受け継がれてきた経緯を述べることによって、馬太は古今集を至上の歌集として高く評価している。

「亡国の音」発表の五日前には、正風自身が『女鑑』六十二号(明治

二十七年五月五日)の「漫録」欄で「歌の話」と題し、歌論を記した。

歌は、実地実情より発し来るところの、咨嗟詠嘆の余韻なれば、  
実地にそむき、実情に反したる時は、いかにたくみなりとも、  
歌の範囲外に脱出したる漫語に過ぎずとは、平素予が口を開け

ば、之を説き、筆を執れば之を述ぶる所なり。(後略)

このように『女鑑』誌上では、古今集・桂園派尊重の姿勢が、幾度となく述べられたのである。また『女鑑』では、短歌に関する項目の多くが御歌所派歌人の手によるものである。正風が説く古今集尊重の歌論は読者の手本であり、歌範であった。さらに、宮中御歌会も積極的に収録されている。それが『女鑑』の編集方針であったと思われる。

その『女鑑』に興味深い「結果」が見られる。それは『女鑑』百四十二号(明治三十年十月五日)の「雑報」欄掲載の一文である。

●中等教育と新聞雑誌と題し、東京府高等女学校長心得なる岩谷英太郎氏は、先月廿日発行の茗溪会雑誌に一篇の論文を草して曰く、

(中略) 東京府女学校に於て、本年六月末日を以て、全校生徒三百六十一人に就きて、常に家庭に於て愛読せる新聞雑誌を調査せしに、左の如き結果を得たり。

(中略)

雑誌の部

一四	女鑑	九二	少年世界	六四	太陽
一五	新声	一五	小国民	一二	家庭雜誌
一二	少年文集	一一	婦人弘道會雜誌	一一	文芸俱樂部
九	女學雜誌	八	婦女雜誌	七	女學講義
六	風俗畫報	五	新小説	三	婦人衛生會雜

三 若桜

三 帝國文學

(以下省略)

備考。右は概ね家庭に於て父兄の購読せしものに係り、女鑑、家庭雜誌等數種を除くの外、故らに生徒の購読せしものなり。

これは明治三十年の「結果」である。この記事から『女鑑』が娘を持つ親の愛読誌であり、女子教育において一番広く読まれていた雑誌であったことが分かる。『女鑑』では、女子教育の徳目の一つとして短歌があり、その模範とされたのが御歌所派の短歌であったということであろう。

次に、『心の花』の前身である『いさ、川』について見てみたい。『いさ、川』では三号(明治三十年三月十八日)から終刊の七号(明治三十一年一月十一日)まで、巻頭に附録として真蹟短歌が掲載された。それを表にまとめてみた。

号	出版年月日	歌人
三号	三十年三月十八日	高崎正風、税所敦子
四号	三十年四月十二日	三条実美、中山忠能
五号	三十年五月二十六日	勝安芳、黒田清綱
六号	三十年六月二十八日	足代弘訓、香川景樹
七号	三十一年一月十一日	近衛忠熙、久我建通

表を見ると、御歌所派歌人が多く名を連ねていることが明らかである。この真蹟については、三号の「やちくさ」欄に次のように記されている。

○いさ、川附録

いさ、川は毎号もしくは隔号に名家の真蹟を写真石板に物して、巻首に掲げむとす。この号にそへしは、高崎御歌所長税所権掌(侍の真蹟なり)。

「名家の真蹟」と述べられているように、当時において彼らは「名家」と称される名高い歌人であり、その「真蹟」は大変重んじられた。短歌の真蹟が巻頭の附録として収録される背景には、彼らが世の中の歌人の模範であり、歌壇の権威として遇せられたという事実が存在した。

また、『國學院雜誌』三卷十一号（明治三十年九月）の「彙報」に収録される「時事」項目に「御歌所の拡張」という記事が掲載されている。

●御歌所の拡張 至尊陛下には、をり／＼軍歌の御作などもあらせられ、歌界の拡張にあつく大御心を注がせ給ふ故にや。御歌所の事業をおしひろめ、先づ其の官位を高め掛員をも増し、旧来の如く短歌長歌にかぎらず、唱歌軍歌なども盛りんに作り出で、大に其の方面の言動者たらむとの御計画なるよしは、かねて聞き及びたる所なりしが、本月二日を以て愈その官制は發表せられ、所員をも任命せられたり。

兼任御歌所長 高崎 正風 御歌所参候仰被付 冷泉 為紀  
御歌所寄人被仰付 本居豊頼 綾小路 有良

黒川 真頼 竹屋 光昭  
坂 正臣 前田 利邇  
中村 秋香 水野 忠敬  
小出 繁 長谷 信成

御歌所参候被仰付 西四辻公業

松浦 銓 植松 有経

西三條 公允

明治三十年九月、これまでの御歌所組織では事足りなくなつていたのが実状であつた。これはまさに、御歌所派のさらなる勢力拡大

を意味していた。ここに、新派による短歌革新運動の興隆、まして衰退の一途を辿る御歌所派の姿は見えてこない。

## 五

「亡国の音」から四年後、子規もまた万葉集を基本とする立場から御歌所派批判を展開した。子規が死去するわずか四年前のことであつた。

### ② 正岡子規「歌よみに与ふる書」<sup>(注10)</sup>

㊦ 仰の如く近来和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば万葉以来実朝以来一向に振ひ不申候。〔歌よみに与ふる書〕

㊧ 貫之は下手な歌よみにて「古今集」はくだらぬ集に有之候。〔再び歌よみに与ふる書〕

㊨ 香川景樹は古今貫之崇拜にて見識の低きことは今更申すまでもなく無之候。俗な歌の多き事も無論に候。しかし景樹には善

き歌も有之候。自己が崇拜する貫之よりも善き歌多く候。それは景樹が貫之よりえらかつたのかどうかは分らぬ。ただ景樹時代には貫之時代よりも進歩してゐる点があるといふ事は相違な

ければ、従て景樹に貫之よりも善き歌が出来るといふも自然の事と存候。(中略) 景樹を学ぶなら善き処を学ばねば甚しき邪路に陥り可申、今の景樹派などと申すは景樹の俗な処を学びて景樹よりも下手につらね申候。(後略) (「再び歌よみに与ふる書」)

〔ケ〕 田舎の者などは御歌所といへばえらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの様に考へ、従てその人の歌と聞けば、読まぬ内からはや善き者と定めをるなどありうちの事にて、生も昔はその仲間の一人に候ひき。今より追想すれば赤面するほどの事に候。御歌所とてえらい人が集まるはずもなく、御歌所長とて必ずしも第一流の人が座るにもあらざるべく候。

(「十たび歌よみに与ふる書」)

〔カ〕の第一回目「歌よみに与ふる書」は、これから始まる痛烈な御歌所派批判の序章であった。ここで万葉集を崇拜した実朝への賛辞とともに、古今集以来の和歌には新味を見出せないとの見解を示したのである。

「再び歌よみに与ふる書」冒頭で貫之と古今集を痛罵した子規ではあるが、景樹は貫之より優れている歌もあると評価している(キ・ク)。しかし、正風をはじめとする御歌所派のことは「今の景樹派」と総

称して切り捨てたのである。

〔ク〕では実名こそ出されてはいないが、「御歌所長」これはまさしく正風のことである。つまり、鉄幹・子規ともに標的は正風であったと言える。御歌所派批判、桂園派批判というよりは正風批判にねらいがあったのである。また、「田舎の者などは御歌所といへばえらい歌人の集り、御歌所長といへば天下第一の歌よみの様に考へ」というのは、そのような意識が確実に根付いていたということであり、その払拭をねらったものと思われる。

しかし、一回目の「歌よみに与ふる書」発表の前日、『心の花』が創刊された。その『心の花』一号(明治三十一年二月十一日)の巻頭欄「論説」を飾ったのが「歌の眼目」と題された正風の一文であった。

歌の眼目とする所は紀氏が「心におもふことを見るもの聞くものにつけていひだせるなり」といはれたる、この思ふことをいひだすにあり。(中略) 歌はものごとくに感動して、はじめて声に発するものなれば、感なき歌は歌にあらざる也。歌はいつばららず、飾らず、實際をすらくといひのぶるをよしとす。然れども感情より発せざれば韻致なし、韻致なければいかに實際をよくいひのべたりとも、決して真の歌とはいひがたし。情内にうごきて詠外に発する時は、風韻雅致せずしておのづから備はる。(後略)

『心の花』が発行日よりもどれだけ早く出回ったのかは分らないが、子規の「歌よみに与ふる書」は新聞に掲載されたので二月十二日当日発行であることは間違いない。そうすると、子規の「歌よみに与ふる書」を正風が読んで「歌の眼目」なる論説を書いたということは考えられないが、子規が正風の論説を読んで「歌よみに与ふる書」を記し、創刊号発行日の翌日にわざわざ発表した可能性はある。

この論説は、『心の花』創刊号の巻頭を飾ったことから、御歌所派の権威を証明した。そこに間髪入れずの御歌所派批判は衝撃であったと言えよう。しかし、この批判によって御歌所派が組織の瓦解にもつながるような本質的な痛手を蒙ったかと言えば、決してそうではなかった。

『心の花』創刊号については、『國學院雜誌』に以下のように取り上げられている。まず、同月発行の『國學院雜誌』四卷四号（明治三十一年二月二十日）「彙報」欄の「新刊批評」項目に「こゝろの華」と題され、掲載されている。

かゝる題号の雑誌あらはれたり。深く国風の文をきはめ、歌をひろめむと、おほけなくも我らのおこし、なりといへるにて、この目的は知られたり。本居、高崎、坂、中村氏などより、塩井武島などいふ新顔の国文家も賛成員のよしなれば、こゝろの人々の、こゝろの花はあらはるゝならむ。初号には、高崎正風氏

の歌の眼目、阪正臣氏の歌語の雅俗など、この路にとりては、有益なる説ども見えたり。阪氏は文の、佐々木氏は歌の選者となりて、歌文の兼題もあり。（後略）

『心の花』創刊号において、正風に続き巻頭項目欄に名を連ねたのが阪正臣であり、御歌所を担う重要人物であった。そして、『心の花』創刊から約一ヶ月後の『國學院雜誌』四卷五号（明治三十一年三月二十日）「彙報」欄の「文界時言」項目では、

●歌の眼目と題して、高崎正風氏の説あり。畢竟歌の真否は、詞の新旧雅俗には拘らず。唯、詞の用ひ方の適否に在る也。第一感情、第二いひあらはし方、第三語句の親和、この三のもの詠歌の大事なり。語句の親和といふことは、古人のあまりいはざりし事なるが、予つねに意をひそめて、古人の名歌を吟じあぢはふに、皆句々語々の接続よく親和せざるはなして、証歌を示されたり。また、初学者につひて教へて曰はく、初学篤志の輩は、つとめて歌の数を多くよむべし。然して、自ら足れりとせず、達人につきて評判をうけ、日に新に又日々にあらたにして、ゆく／＼道の蘊奥に達せむことを期せざるべからずとなり。（こゝろの華第一）

とあり、「歌の眼目」の要約のみを記した記事が掲載されている。『心の花』が折衷的立場をうたった短歌雑誌でありながら、時の御歌所長が巻頭で堂々と歌論を語ることは、当時の歌壇の主流が御歌

所派にあつたことの何よりの証拠と言える。それは、『國學院雜誌』の「彙報」で二号続けて取り上げられていることからうかがえ、御歌所派の歌論が作歌に際して大変重要視されていたことが知られる。「歌よみに与える書」から一年半年後、『心の花』二巻八号（明治三十二年八月十日）の巻頭欄「筆陣」を飾つたのは、再び正風であつた。「歌の要点」と題し、不変の歌論を主張したのである。

おのれは、もと景樹より出でたりといへども、真淵あるは景樹他の流派に拘泥するものにあらず。只古人の道を祖述し、そのあとをふむものにして、別に独創の意見を有するにあらざれば、持論として語り、公にすべきものなし。元來歌の要とするところは、紀氏が「心におもふことを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり」といはれたる、この思ふことをいひ出すにあり。（中略）

近來種々の歌の団体起り、かにかくとあげつらふものおほし。これも世の風潮に伴ふものなれば、歌道の為には発達の始めとでもいふべきか。然れども貫之時代に於てすら、僅かに六人の歌仙をあげられたるを見れば、真の歌人といふべきもの、果して世に出でんことは、かたしといふべし。この六人も貫之は各其長短を論じ、山柿の二聖を揚げ、其他は「野べに生ふるかつらのはひひろごり林にしげき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて其のさま知らぬなるべし」といはれたるを見れば、歌

のかたきこと知るべきなり。（中略）願はくはこの意をよくさとり、古人に凌駕する人材の輩出せんことは、おのれの御歌所長たる職務上希望する所なり。（後略）

正風自身「近來種々の歌の団体起り、かにかくとあげつらふものおほし。」と述べていることから、鉄幹と子規の論難によつて自ら矢面に立たされていることは承知してははずである。それにも関わらず、臆することなく、一貫して古今集尊重の遵守を述べている。正風の姿勢は、新派の氣運に微動だにしておらず、相手にさえしていない。つまり鉄幹・子規は、御歌所派の存在や地位を揺るがす程の力は持ち得なかつたのである。

それは子規も痛感していたようで、『日本附録週報』（明治三十二年十二月四日）掲載の「短歌を募る辞<sup>（後略）</sup>」で述べている。

昨年のはじめふと思ひ立つ事ありていづぞは言ひ出でんと心くみし我歌論を述べて世の教を俟ちしに思ひの外に議論はげしく冬枯の筆に火花を散らして此争ひいつはてんとも知らざる程の有様なりき。（中略）固より昨年以前に多少の萌芽を含みし革新派は昨年以後いちじるしく其枝葉を伸ばして今は、や誰の目にも見らる、程になりぬ。従ひて中央にも地方にも新聞に雜誌に往々新派と称する歌の載せられたるを見る。されど從來の陳腐なる歌を載せたる新聞雜誌の数にくらぶれば百の一にも当らず。（後略）

御歌所派を真つ向から非難し、短歌革新を訴えた鉄幹と子規は当時の歌壇へ衝撃を与えた。なぜなら御歌所派は歌壇における絶対的權威であったからである。しかしながら二人の登場を見ても、揺るぎない勢力は保持し続けられたのである。それは明らかな事実であった。

『心の花』三卷三号（明治三十三年三月十一日）から『心の花』三卷六号（明治三十三年六月二十日）では、四回にわたり「文庫」欄に「明治の御歌所」が連載されている。それを記したのは井原豊作であり、石樽千亦とともに『心の花』の編纂と発行に関わった中心人物であった。豊作は「明治の御歌所（其一）」（『心の花』三卷三号）の前書きを次のように記している。

今の御歌所の職制は明治三十年十月の宮内大臣達により始めて定まりたるものにして、其以前は侍従職、其他の附屬と為り居りしが為、明治初年以來今日に至る迄の沿革の如きも容易に知るを得ざりしを、此頃或人の持てる日記により其変遷の大体を知ることを得しを以て、以下号を逐い順次掲載することとせり。即明治の御歌所として歌学史料の参考とも爲るを得ば予の幸也。

原拠である「或人の持てる日記」についての詳細は記されておらず不明であるが、明治二年から明治二十三年までの御歌所機関の組織、名称、設置、御歌所派歌人らの進退、御歌会始などが具体的に

記されていることから、御歌所に精通した人物によるものではないかと想像される。年代とともに日付までもが克明に記されており、御歌所の内情をうかがうに足る史料である。

「歌よみに与ふる書」が登場した明治三二年以降に限定しても、所謂旧派の言説はかなり豊富に提供されていた。（後略）

という久保田啓一氏（註12）の指摘にもあるように、明治三十三年時の『心の花』はこのような記事を重要視し、誌面構成を行っていたのである。これがその当時の『心の花』の読者にとって有益な情報であったことを編集者側が判断したからこそその連載であったと受け止めるべきであろう。

## 六

揖斐氏の見解に戻る。子規の登場を見れば、鉄幹は御歌所派批判の突破口となつたのかもしれない。しかしながら、鉄幹に始まり、子規によつて新たに御歌所派批判がなされても、正風が説く歌の本質は変わることなく、古今集尊重の歌論は雑誌を通して堂々と展開されていくのである。「歌よみに与ふる書」から一年半後に発表された「歌の要点」を収録する『心の花』の巻頭項目欄「筆陣」を飾つたのは正風一人であった。巻頭を飾ることは、その雑誌の看板であることを意味するとともに、雑誌運営にも大きく影響している。当時の歌壇の雰囲気をも最も反映する場所と言えよう。

明治三十一年、「消長」は「決して」いかなかった。だからこそ、子規の「歌よみに与ふる書」発表があつたと見るべきではないだろうか。

鉄幹や子規によつて端を發した御歌所派批判の標的は、御歌所長の高崎正風であつた。それにも関わらず、正風は意に介せず古今集尊重の歌論を提唱し、またその発表の場を最有力の短歌雑誌に与えられたのである。特に、『心の花』創刊号（明治三十一年二月十一日）と『心の花』二巻八号（明治三十二年八月十日）の巻頭を正風が飾つた背景には、御歌所という權威を尊重した雑誌の編集意図がうかがえるのである。鉄幹と子規の影響を全く受けず、むしろ歌壇において御歌所派が勢力を誇示するのを追認するかたちとも言える。これがまさしく鉄幹と子規登場時の歌壇状況の実態であつた。そこには、後に新派によつて固定化された低い評価などは存在しなかつた。

注

(注1) 小泉茅三氏『近代短歌史 明治篇』（一九五五年 白楊社）、「第四章 近世期継承和歌の円熟及び其再生と近代意識の萌芽」。

以下の研究書及び雑誌の引用に際しては、通行の字体に改め、適宜句読点・濁点を補い、振り仮名は省略した。また、私に傍線・文字囲み・記号を付した。

(注2) 武川忠一氏『近代』への歩み―革新の達成―（『和歌文学講座 第

九卷 近代の短歌』一九九四年 勉誠社、「近代短歌の概観」所収）。

(注3) 本林勝夫氏「黎明期―総論ならびに「あさ香社」の成立まで―」（『和歌文学講座 第九卷 近代の短歌』一九九四年 勉誠社、「近代短歌の概観」所収）。

(注4) 『心の花』では「めざまし草」と記されているが、複製版（臨川書店発行）の表紙の表記、また『日本近代文学大事典 第五卷』（一九七七年 講談社）の「めざまし草」項目（重松泰雄氏執筆）に依い、本稿で扱う際には「めざまし草」と表記する。

(注5) 『心の花』の発行所については、一号―二巻一号がこ、ろの華発行所、二巻二号―三巻五号が鶯蛙吟社、三巻六号からは大日本歌学会となり、のちに竹柏会出版部となる。

(注6) 御歌所に関する研究としては、恒川平一氏『御歌所の研究』（一九三六年 遷歴記念出版会）の他、小泉茅三氏『近代短歌史 明治篇』所収「第一章 和歌伝統の精神と継承」の「一、明治宮廷と和歌」、篠弘氏「旧派和歌」への視角」（『短歌』二十八巻十二号、一九八一年十二月）、浅井清氏他編『研究資料現代日本文学 第五卷 短歌』（一九八一年 明治書院）所収「旧派和歌」「新派和歌」項目（武川忠一氏執筆）等がある。

(注7) (注3)に同じ。

(注8) 揖斐高氏『和歌改良論―新体詩と長歌改良、そして短歌革新への道』（浅田徹氏他編『和歌をひらく 第五卷 帝国の和歌』所収、二〇〇六年 岩波書店）。

(注9) 引用は、明治文学全集51『与謝野鉄幹与謝野晶子集 附明星派文学集』（一九六八年 筑摩書房）による。重要と思われる箇所を取り上げ、簡条に列挙した。『歌よみに与ふる書』の引用に際しても同様である。

(注10) 引用は、復刻版『日本』第二十八卷(一九八九年 ゆまに書房)による。

(注11) 引用は、復刻版『日本』第三十三卷(一九八九年 ゆまに書房)による。

(注12) 久保田啓一氏「近代歌人としての立場―万葉・古今享受と幕末歌人評価と―」、『文学』六卷三号、二〇〇五年五月)

〔付記〕本稿は、平成二十年度広島大学国語国文学会研究集会(十一月二十二日)において口頭発表した「明治二十―三十年代の短歌雑誌に見る旧派歌壇」の一部をもとに執筆したものである。席上および発表後にご教示下さいました方々に心より御礼申し上げます。

― ちようふく・かな、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 ―